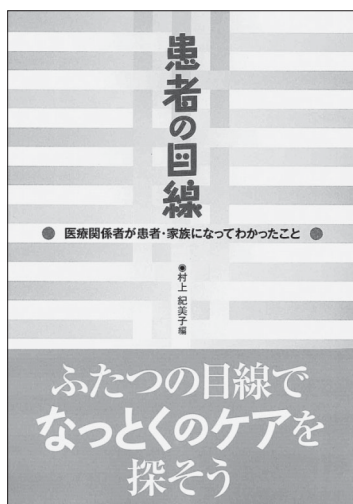




村上紀美子 編
本体 1800 円＋税
B 6 判／医学書院／2014 年

評者

内木美恵 日本赤十字看護大学大学院講師

妊産婦に寄り添う時の 助産師の目線は

本書を読み終えて、私のなかにはいくつかのフレーズが残った。「看護師は遠慮なく何でも聞いてくださいと言うが、患者はなかなか聞けない」「医療主導ではなく、患者と家族の希望や意思を尊重する」。これらは基礎教育や卒後教育で常に耳にしているフレーズばかりだ。しかし本書を読みながら、実際に実践できているのかという疑問が浮かんだ。そして同時に、私が助産師として産婦人科病棟で働いていた時のこと、自分が入院した時のことを思い出していた。

私が病院で助産師として働き始めたころは、妊婦や患者などを対象に「遠慮なく何でも聞いてください」というフレーズをよく使った。しかし、対象が本当に何でも聞ける雰囲気をつくり、何に困っているかを想像し、対象の表情からも問題を読み取ろうと努めていたかという、必ずしもそうではなかった。本書にもあったが、治療の優先

や、業務が増えて煩雑になることへの懸念、出産をしていない私が答えてもいいのかといった不安が頭をよぎり、口先だけでこのフレーズを使っていたこともあったと思う。加えて、経験が浅いことで対象の生活を察しようにも想像がつかず、個別性を考えた看護やアドバイスが難しかった。対象の住居構造や家族構成、過ごし方、仕事や趣味まで考えて説明したり、アドバイスしたりできるようになったのは、自分が病気を体験したり、さまざまな対象へのケアや妊産婦指導を経験したりしてからだった。

対象や家族から教えてもらった個々の思いや生活環境からくる健康問題、そして私の看護に対するフィードバックに気づいてからは、対象の個別性に視点を置き、より実生活に則したアドバイスをしようと努めるようになった。

さらに、対象が何でも気軽に聞ける雰囲気は、対象の生活や価値観を中心に置かなければ実現できない。対象のライフスタイルや仕事、人生で大事にしていることに目を向けて医療の提供を考えたい。本書のなかにある「医療者の説明が腑に落ちた」という言葉は、医療者の一方的な意見ではなく、対象が納得いく治療や医療の方向性が見出せたからこそ出てくる。医療者が対象の上に立つて指示したり、説き伏せたりするのではなく、対象とともに考える姿勢をもち続けたい。

また、助産師の対象である産婦は陣痛を感じて出産にいたるが、苦しみの先にうれしい結果がある痛みは、病気にはない。助産師は、妊産婦がもっている産む力を最大限に引き出し、つらい痛みを乗り越えお産へと支援することが役割である。本書の「助産師はお産の水先案内人」という言葉に助産師への期待が込められている。

2015 年 4 月に WHO が帝王切開率の上昇に警鐘を鳴らしていた。お産の水先案内人として、妊産婦の力を引き出しつつ、対象の目線で痛みや苦痛に寄り添う看護を心がけたい。本書は私にとって、あらためて自分の看護を振り返るきっかけをつくってくれた。

1